

日本と台湾の「心と心の絆」

(財) 交流協会 高雄事務所所長 野中 薫

東日本大震災が発生して3ヶ月が経過しようとしておりますが、この間、台湾は見舞いの言葉や励ましのメッセージ、緊急援助隊、緊急物資、さらには我々の予想をはるかに超える多額の義援金など、様々な形を通じて苦境にある日本を支援してくれています。人口2300万人、平均所得約2万米ドルの台湾が世界で最も多い約180億円もの義援金を集めたことは、台湾に暮らす日本人でさえも、正直言って驚かされました。日本企業関係者の間では、台湾人従業員がいかに関心のあるように日本を心配し、彼らの給与水準では考えられないほどの義援金を寄付した方が、いろいろなエピソードとともに話題を集めています。これ程までの支援について、台湾人は「921中部大地震や一昨年の台風による豪雨水害に対して、世界で真っ先に救いの手を差し伸べてくれた日本の恩義に報いたいだけ」と、ことなげに答えます。確かに、台湾の人々は日本人同様に義理堅いと言えますが、今回の心温まる支援の背景には、金額では表せない善意がそれ以上にあると感じます。この3ヶ月は戦後60年以上たった今も薄まることのない、日本と台湾の心の絆の深さを改めて確認する時間であったように思います。

5月8日は、「嘉南大圳の父」と慕われる八田與一技師の命日であり、南部の台湾人にとっては特別な日です。八田技師の功績や嘉南平原の農民たちの同技師に対する思慕の情については、いまさら述べる必要もないことですが、本年は恒例の追悼式に先立って「八田與一記念公園」の開園式が盛大に行われ、馬英九総統、楊進添外交部長等の政府要人並びに日本からは八田技師と郷里を同じくする森喜朗元総理ほか24名の国会議員等も出席し、台湾の農業振興に尽くした八田技師の業績を改めて称えました。69回目の追悼式では、台南市長をはじめとする台湾側代表者が没後69年を経た今でも敬愛してやまない八田技師に対する感謝の気持ち

を次々に述べました。最後に、八田技師6女の茂子さんは、「昭和6年生まれのは80歳になるが、台湾で暮らした12年間は自分の人生の中で最も楽しく、幸せな時でした。石川県出身となっておりますが、私にとっては台湾が故郷だと思っております。昭和42年に台湾の方が父の霊前祭を行っていると言われ、それ以降何度か足を運んでいます。来るたびに盛大になって思う。台湾の皆さんがこんなにも父を慕って下さることに感謝しています。父母もさぞかし喜んでいただいていることと思います」と挨拶されましたが、参列者全員の胸に深く響き、感動的な言葉でした。「台湾に尽くし、台湾を愛した日本人」は八田技師のほかにも、明石元二郎総督や鳥居信平、濱野彌四郎、新井耕吉など多数おり、いまだに台湾の各地には、彼らの功績を高く称え、深く感謝し、慕い続けてくれる人々がたくさんおります。今年の八田與一技師追悼式は、東日本大震災に対する台湾の人々の心温まる支援を実感する中での開催であり、日台双方の関係者の挨拶を聞きながら、日本と台湾の「心と心の絆」の原点は、まさに台湾を愛した我々の先達たちの功績とそれに報いようとする台湾の人々の思いにこそあり、日本に対する特別な親近感はこの脈々と受け継がれてきたのではないかと深く感じさせられました。私が感じた、こうした思いは追悼式に出席したすべての参列者が共有したに違いないと信じて疑いません。

東日本大震災に被災された皆様方に対して、心からのお見舞いと一日も早い復興をお祈り申し上げますとともに、今回の予想を超える支援に象徴される日本と台湾の心と心の結びつきが、これからも末永く維持されることを願っております。この寄稿の直前に、台北駐日経済文化代表処が実施した意識調査において日本国内で台湾に対する好感度、親近感が大幅に上昇したとの報告を知り、日台交流の現場で働く者の一人として大変うれしく思っております。